

テープ＝No：9 葛根湯・大塚先生解説・昭和四十九年十二月十七日（火）・まとめ吉本
（大塚）あんた達は漢文が読めるようになったな。今北里で医経解或論を読ましているんだけど、読むことは読むんだけど意味の通じないような読みかたをしちゃって、やっぱり・・

（吉本）これは慣れですかね？

（大塚）うん、これは小説と違うからね、熟語がわかれば読める。これはね漢文の先生だって読めない人がいる。それは特別な言葉があるから、医者言葉はね。字引をひっぱってもわからないような字が有るんだよ。この頃使わんような字を使っているからね。

葛根加半夏湯（伊藤読み）

（大塚）葛根加半夏湯は下痢せず嘔する者となっているけれども、普通は吐く場合に使ったことはないけれどね、私はね。太陽と陽明の合病というのは、太陽病の症状である脈浮とか悪寒、項背強張るとかいった症状と、陽明病というのは便秘して腹が張ってという意味ではなくって胃腸障害があるというに考えればいいんで、下痢するとか、腹が痛いとか吐くとかという症状をね。だから太陽と陽明の合病で下痢する場合は葛根湯で、下痢しないで吐く場合は葛根加半夏湯でよいという事だから。下痢するとか吐くとか食欲が無いとかという胃腸障害がある時を指すと思えばいいから、ここはね。陽明の合病で腹満、便秘では無いからね。条文にとらわれないでいいから、胃腸障害があるというふうに考えればいい。

けど普通は葛根湯症で吐く場合より、むしろ私たちは葛根湯を使いたいような場合で胃腸が弱っていて、もしかして吐き気が来るかもしれないという時に使うんで、実際に吐く場合には使う事はない。

葛根黄連黄芩湯（伊藤読み）

（大塚）葛根黄連黄芩湯は首から背中が凝って、凝るだけでなく痛い場合もあるよね、みぞおちがつかえて食欲があまり無い。それから動悸、下痢という事になっているけど、これらがみんなそろって全部あるという意味ではなくって、下痢しない場合もあるし動悸しない場合もあるわけだ。葛根黄連黄芩湯の内容をみるとわかるようにこれは三黄瀉心湯の大黄の代わりに葛根と甘草があるわけだから、大黄を使う必要がない場合が考えられるわけよね。これは医者が桂枝湯を使わなければいけない場合にまちがって下剤を使ったと、下したと、そのために「遂に」、この「遂に」というのは時々出てくるけれどもとうとうという意味ではなくて、医者が下したという事が原因でそれで薬の効力が無くなっても二日も三日も下痢が続く場合を指す。医者が間違っ下したという原因で下痢が止まらなくなったという事。食べ過ぎて下痢をするというのとはちがう。

それで下痢が止まないで脈が促とあるが、脈が促というのは速くて時々止まる、結滞すること。脈が浮いて速くて結滞するのが促だ。けどこれはね結滞が無くたっていい。要す

るに脈が浮いて速いような者に使えばいいんで、必ずしも脈が時々止まらなければ使えないかというところばかりでもない。

「表未だ解せざるなり」だから表証がまだ残っている。そういう時で喘鳴があって汗が自然に出る者となっているけれども、これは喘鳴が無くてもいいし汗が出ていなくてもいい訳だ。これは雑病に使う時はこういう必要ない。ただ傷寒や中風の場合はこういうことがあるけれど普通はそういう急性の患者はほとんど来ないからね。今朝から熱が出て医者薬にもらったがこうなったというような患者は来ないからね。

だから「喘して汗出ずる」というのは一般の雑病で来る場合はほとんど関係ない。ただこの場合に「脈促」ということは熱のある場合のことだけであって、また普通の血圧が高い患者の場合も脈が浮いてもいないし速くもないし、葛根黄連黄芩湯を一般の雑病に使う場合には類聚方広義の欄外に書いてあるような場合が主であるよね。

「平日」と書いているから普段から首や肩が凝るということで、同時に胸がふさがって気分が何となく憂鬱で気分が暗くなってさっぱりしないという者にこれを使うと。場合によっては大黄を入れた方がいいと。そうすると三黄瀉心湯との合方ようになってくるわけだ。これは黄連と黄芩が一種の鎮静の作用が有るから、のぼせるようなところがある者にいい。胸がつまって胸に熱感を覚えるわけだ。この場合胸やけがあってもいいし、眼が赤くなって結膜炎のようになって痛い場合にもよい。それから歯ぐきや歯が痛む時によい。

こういう場合はのぼせたように上に気が上がって来るような、あるいは熱感があるような時によい。黄連、黄芩は消炎作用があるから目や歯の痛みに使うわけよね。

それから「口舌腫れ痛み腐乱の者」だから口内炎を起こしてただれて痛いような者。そういう場合に大黄を入れる。大黄を入れるのは便秘していなくてもいいわけで消炎の目的で入れるわけだから分量はごく少なくてもいいわけよ。0.3グラムとか0.5グラムでいい。この場合は消炎を誘導するために使うことが多いからたくさん使う必要はないよね。

高血圧の患者で首筋が凝ってのぼせてくるというような患者には私はよく使ったことがある。それからこの頃はめったに無いけれど疫痢に使った例では、矢数君のところの圭道君が三つか四つの頃によく疫痢をやったんだよ。その時こうゆうのをよく使ったな～

熱が四十度も有って顔が真っ赤になった時に葛根黄連黄芩湯を使ったな～。葛根湯より葛根黄連黄芩湯を使わないといけない疫痢があるんだよね。それに下痢もするしね。

(吉本) 下痢をしていても大黄は入れるんですか？

(大塚) 疫痢の時には大黄を入れないんだよ。葛根黄連黄芩湯だけ。この葛根黄連黄芩湯のことで桑木君が藤平君にたたかれているな。漢方の臨床を読んだ？張明超は医者でも無いし薬剤師でも無いし、ただお父さんが漢方医者だったということで漢文が読めるということだけでああゆうことを書くもんだから。それを亦桑木君がかつぐもんだからつき上がってから。

(吉本) 毎月、やり取りが劇しいですね。

(大塚) うん！

小柴胡湯類聚方の部分 (伊藤読み)

小柴胡湯の方極文・及び傷寒論・金匱要略の条文について

(大塚) 柴胡剤は煎じて中ほどでいっぺんかすをこしといて亦煎じつめるということをする。このことをうちの子供達にやってみたけれども薬の味が柔らかくなって飲みやすくなる。水の量が一斗二升と多いようだけれど今の量では一升二合ぐらいになるんだよ。一升二合ぐらいを六合ぐらいに煮詰めるんだよ。半分にね。そしてかすをこすだろう。かすをこしといて汁だけを亦煮詰めて三合ぐらいにするんだよ。そして一合ぐらいを日に三回に飲むんだよ。うんと時間がかかるんだよ。そしてここでかすをこしといて汁だけを煮るとね、柴胡の変な臭みがとれて、今の中国から来た柴胡はあまり匂わないけれど本当の三島柴胡のいいやつは匂いがぶんぶんするんだよな。非常に味がよくなって飲みやすくなるし、おそらくは柴胡剤を煎じる時には水を多くして煎じることが成分を出すことにおいて必要なかもしれない。水を一升二合にして半分にするというと相当時間がかかるよな。それを亦半分にするんだからかなり濃縮するんだね。あなたたちが家族に飲ます時にはこの通りにやってみてごらん。うんと味がちがうから。ことに薬をきらう子供達にこの通りにやったら喜んで飲む。それから加減の方というのがあるがこれはいらんな～。

ちょっとおかしいよ。「胸中煩して嘔せず」だろ。吐かないから半夏と人参を去るということはまあわからんことはないけれどよ、「栝蒌実を一枚加える」というのはどういうことかな？「渴する者は半夏を去る」というのはわからんことはないけれど、人参を足して栝蒌根を入れるというの？そして「腹が痛い場合に黄芩を去って芍薬を加える」なんて黄芩を去るのか？そして「もし胸下痞硬の者には大棗を去り牡蠣を加える」というけれど小柴胡湯は胸脇苦満や心下痞硬がある時に使うんだものね。大棗を去ったら意味が無くなるよ。「小便不利の者には黄芩を去って茯苓を加える」とか、「渴しないで外に微熱がある者は人参を去って桂枝を加える」とかこのような加減はおそらく後人の仕事によるもので、これは小柴胡湯を使う上で意味がないと思うな。

○第一条・太陽病。十日以去。脈浮細而嗜臥者。外已解也。設胸滿脇痛者。與小柴胡湯。

脈但浮者。與麻黃湯。

「太陽病、十日以去」というのは太陽病に罹って十日たってという意味で、普通太陽病というのは三日か四日すると小陽病に入ってくるのが普通だが、この人は太陽病で十日たっても脈が浮いていると、浮いているけれども脈が小さいと。そして起きて働きたくなくて寝ていたいと。脈は浮いているけれども「外すでに解するなり」だから表証は取れたと考えてよい。そして「もし胸滿脇痛の者」だから胸が張ったり脇腹が痛かったりする者は小柴胡湯を与える。そして「脈が但浮の者」のただというのはほかのことは無くってと

いう意味で細などのほかの脈証がなく浮だけという意味なんだ。但だをね！この頃は但しという意味に使うけれどね。これはおもしろい意味があつてね、本来の意味は、片一方の肩を脱ぐ。或はそれだけ、もっぱらそれだけ、というような意味がある。ただこれだけという意味に使う。しかしとか但しとかとして使っているけれども本来の意味はそうではないのよね。脈が浮で細であると表証がとれている可能性があつてもし胸満脇痛があつたら小柴胡湯を使うけれども、脈が浮だけであつたら表証があるから麻黄湯を使うんだ！という意味なんだ。ここの部分は脈が大切になってくるわけだが、しかしここは感冒とか流感とか急性病の時だけで雑病では必要ない。あなた達が急性病をみたらこうゆう事が出てくるわけよね。

○第二条

「傷寒五六日中風。往来寒熱」だが、中風は日数によって病証が変化する事が割り合い少ないけど、傷寒は病気が表だけでなく裏にまで及ぶ可能性があるわけで、傷寒というのは太陽病の証を現すとともに病気の一部がもうすでに裏にまで入っている事を言う。この前あなたたちに話しただろう。風というのは当たっている所だけがたがたするだけで、雨戸を閉めていると風は入って来ないから。風が当たっている所だけに病気が起こる。だから太陽の中風といったら表証だけで裏にまで影響が及ばない。傷寒というのは例えば家の窓を閉めていたって風が入ってくるように、表だけでなく裏にまで影響が及んでいるの

が傷寒だから。もともと傷寒とはそうゆうふうな病気だから傷寒で五六日もたてば小柴胡湯の証になる。けれども中風の場合には日によってどうという事はない。ただ中風でも往来寒熱になって熱と悪寒が交互に出る事もある。

それと胸脇苦満だけれども、これは腹診をして抵抗と圧痛があるのを胸脇苦満というけれども、それはね日本人の発明で傷寒論の本来の意味は自覚症状なんだよ。だから腹診しなくたっていいんだ。患者がこの辺が（上腹部を抑えながら）いっぱい詰まったように苦しい、胸から上腹部にわたって塞がったような、張ったような感じがする場所でそれらは自覚症状なんだ。他覚症状がなくなるといい。ただ一般雑病の場合は腹診が意味があるけど。風邪とか流感とかの急性熱病の場合は腹証によって確かめる必要はないんで、患者自身がこの辺が詰まって苦しいといえればそれでいいわけだから。ただ熱の無い場合に小柴胡湯を使う時には腹診によって心下部の抵抗圧痛をみる必要があるけれども、そうではなくって五六日前から熱があつて寒けがして熱が出たり引っ込んだりすると、それで胸が詰まったようだとはいえそれだけで胸脇苦満でいいわけだから。

すべての病気を雑病の場合と傷寒の場合と区別しなければだめなんだよね。ただ薬局に来たり我々の所に来た場合は雑病で傷寒は来ないから。ことに子供は小柴胡湯の場合でも胸脇苦満はほとんどないんだよ。もう中学校位になると胸脇苦満がわかるけど、小学校の子供や幼稚園児やその下の乳児になると胸脇苦満が無くて小柴胡湯の証がうんと有るから

。子供には小柴胡湯の証が多いからね。

ただ気をつけてみると二～三才の子供にね、腹診すると肝臓が触れるんだよ。これは病気ではなくて誰でも触れるんだよ。それは胸脇苦満でもなんでもない。肝臓が触れるから胸脇苦満とはいかない。子供で熱が上がったり下がったりして吐き気がして食欲がないと苦しんでいる場合は小柴胡湯の場合が多いから。その場合は腹証によって胸脇苦満を確かめなくてもいいから。

「黙黙として飲食を欲せず」黙黙としてというのは黙りこくってご飯も食べないし水も飲みたがらないというのが目標だからね。「心煩喜嘔」というのは胸苦しい、何となく胸が詰まったようで苦しくて食欲がなく時々吐くと。この吐くというのは実際に吐いても吐かなくて吐き気だけでもいいんだよ。ここまでが一区切り。「傷寒五六日～心煩喜嘔」それで「小柴胡湯が之を主どる」でいいんだ。全部の証がそろってなくてもいいんだ。例えば「黙黙として飲食を欲せず」だけで「心煩喜嘔」がなくてもいいんだ。「或は」以下の所はある場合もあるし、ない場合もあるから或はになっているんだから。「或は胸中煩し嘔せず」だから場合によっては胸が苦しいが吐かない場合もありますと、これも小柴胡湯が使えると。「或は渴する」この口渴はひどい渴ではないわけだ。少し水が飲みたいんだ。「或は腹中痛み」おなかが痛いこともある。「或は脇下痞硬」脇の下が固くなっていることもある。「或は心下悸し、小便不利」これはひとつの症状だから、動悸がして小便が

出ない場合もある。ところが次は或は渴せずだからのどの渴かない場合もあると。それで「身に微熱ある者」とあるが微はかすかという意味だけれど、ここでは中に隠れて外に現れないという場合を指している。この場合は熱は外には出ていないけれども熱が内側に有って外にかすかに感じられるという熱だから。それから「或は咳が出る者」と。これらはみんな小柴胡湯を使っていいと。

それで熱の問題だけれど前にも何回も言ったと思うけど、漢方に於て熱が高いというのは体温計で熱を計って体温が高いという意味ではないから。患者自身が熱感を覚えて熱があると、それから小便が着色されて濃くなり熱がある小便にが出ると、それから舌を見ると渴しているとか、脈が速くなっているとか、というような体温計の無い時代の話しだから。だから体温計で七度二分あるから微熱だと考えては困るんだ。そうではなくて漢方は熱と言うのは新陳代謝が盛んになっているのが熱だから。新陳代謝が衰えてくればこれは寒だから。だから新陳代謝が衰えて来た場合には体温が三十九度有ろうともやはり寒ということになる。その場合に寒であるか熱であるか見分けるのは脈だとか舌だとかそれから小便だとかで、患者が訴えるところで判断しなければいけない。

昔、『漢方と漢薬』で私が二回か三回に渡って連載したことがあるが、その子は十くらいの子だったけれどね、その子の家庭は漢方党でみんなが漢方を飲んでいたんだよ。そしたらね子供が熱があるから往診してくれと頼まれたから往診に行ったんだよ。行ったらね

体温計で熱を計ったら三十九度から四十度熱があるんだよ。そして寒い寒いと言って青い顔して寝てるんだよ。その時たぶん麻黄湯を使ったと思うんだ。しかし麻黄湯を使って汗が出てても依然として熱が下がらないんだよ。二～三日たったから小柴胡湯の証だと思ったけれども、わからないんだよね。だけど小柴胡湯を使ったんだよ。そうしたらますます食欲がなくなったんだよ。おかしいと思って石膏の証かと思って小柴胡湯に石膏を入れて使ったけれど一週間たっても熱が下がらず、かえって熱が三十九度から四十度と上がってくるんだよ。それで矢数君に相談して「矢数先生いっぺん診てくれんか」と言ったんだけど矢数君は傷寒の治療は余りやったことがないのでわからんと言う。

ところが十日もたってからだったかな～。どうもこれはチフスもしれん！チフスだったらこんな所に置いとかれん。チフスは伝染するからね。と思った時にはもうお母さんに伝染していたんだよ。今度は母親が熱が出て来たんだよ。それで私は困ってね。どうしようかと思ったんだよ。そしたら子供はね、四十度も熱があるのに寝ているのを見たら真っ青な顔をしてね、「寒い、寒い」と言って湯たんぽを入れて寝ているんだよ。

おかしいな？これは陰証かな！とその時思ったんだよね。それで小便さしてみたんだよ。そしたらね、起き上がったら熱があるのに「寒い、寒い」と言っとうんと寒がるんだよ。小便を見たら水のような小便が出てんだよな。はは～これは附子の証だ！とにかく四十度も熱が出ていて水のような小便が出ているのは新陳代謝が衰えてる、それで寒いし、こ

れは間違ってる、しまった！と思って真武湯を飲ましたら三日して熱がスーとひいて治っちゃったの。だから漢方では熱が四十度あったって附子の証があるということね。

それをね『漢方の臨床』に書いてある。だから熱のある場合は小便を見ると言うのもひとつの目標だよな。四十度も熱があるのに舌が湿っていて普通の舌をしていたらこれは陰の舌だと思った方がいい。それと食べ物の味がちっとも変わらないというのも陰だよな。熱だったら口が苦いとか何とか言うからね。だから小柴胡湯の証と真武湯の証は非常に似ているんだよね。

この家に来てからのことだけど、吉祥寺の患者でうちに時々来ているんだけど。主人が熱があるから往診してくれという。高い熱ではないけれど三十八度位の熱がある。診たら舌に白苔がついてやや乾燥している。寒けはたいしてないけれど食欲がない。舌に白苔があって食欲がないし熱があるということで小柴胡湯を使ったんだよ。そしたら熱がぐーと上がっちゃってね。下痢が始まったんだよ。おかしいな？小柴胡湯で熱が上がって下痢が始まるというのは？と思ったけれど、ことによるとこれは附子の証かと思って真武湯を使ったら熱がすーと下がって下痢も治っちゃった。だからその人はその時に白苔が出来たのではなくて普段から胃腸が悪くて以前から白苔があったんだよ。小柴胡湯の証が現れた時に白苔が出来たのではないんだよ。だからその時に現れた証がその病気の証であるかどうか、舌苔であれ腹証であれそれは判断しなければいけない。例えば普段から胸脇苦満が

ある人があるだろう。そんな人が葛根湯の証を現したって胸脇苦満はのかないもの。

普段から大柴胡湯を使ってる患者ね。それが風邪をひいたからといって大柴胡湯の腹証がなくなって葛根湯の腹証になるわけではないからな。腹証は動かんだろう。腹証でやるんだったら葛根湯の証などなくて年中柴胡剤の証になるもんな。このようなことは今度の病気が前からある舌証や腹証と関係があるかどうかを判断することも問題になってくるわけね。そんな時には早く心を切り替えなければいけないんだ。やってみてダメだったら、はは～これはダメなんだな！と思ってね。

私はここにある胸脇苦満（上腹部を抑えながら）が昭和五年に東京に出て来て湯本先生に診てもらった時からあるんだよ。消えたことがないんだよ。それならいつも柴胡剤かというところではないからな。

○第三条

「血弱気盡き、腠理開き、邪氣因って入り、正氣と相搏ち、胸下に結び、正邪分争し、往来寒熱し、～也」

この条は前の第二条の説明で後人の注釈だろうといわれている。「血弱気盡き」というのは血気が弱く血行が悪くて、そのために「腠理」・これは皮膚と粘膜の、肌の穴というか、粘膜でいえば栄養を吸収するところ。皮膚でいえば汗を出す所などを指すんだ。

腠理が開いたために皮膚やら粘膜から邪氣が入ってくるというんだよね。邪氣が入って

きたために「正氣」・これはその人が持っているエネルギー、生きる力とが邪氣と「相搏ち」だから、搏つとは相撲を取ったりすることだから、正氣と邪氣が争うことだ。

皮膚や粘膜から邪氣が入ってきて自分の生氣と競争するというか、そこであい争ってそのために胸の下で固まりになって、「正邪分争し」だから自分の持ち前の力と邪氣が互いに競争して争うと。そして往来寒熱になると。そして正が勝った場合は熱になり邪が勝った場合は寒になるんだよね。往来寒熱というのは正氣と邪氣とが相争う形なんだから。

「休作」というのは発作のこと、「時有り」とは時々熱が上がったり下がったりすること、そして「黙々として飲食を欲せず」という状態になる。「臟腑相連なり」というからこれは心臓、肝臓、胃、脾臓、などみんな連なっておって、邪は上にあるが痛みは下に來ることが多いと。だから吐かすことがあるんだという意味なんだけど、要するにこの問題は前の条文の注釈と思えばいいんだ。

○第四条

この条文は小柴胡湯を飲んで後でのどが渇くようになった者は陽明で白虎湯の証になる者がいるという意味だが、必ずしもそうではないけどね。「法を以てこれを治せよ」だからその時の症状を判定して治せよという意味だ。

○第五条

この条文は病氣になって五六日たった後に、脈が遅くてしかも浮いて弱いと、そして「

悪風寒」悪風でもいいし悪寒でもいい。しかし手足が割合暖かいんだ。「医二三これを下し」だから医者が治療を間違っただけでこれを下したと。おそらく脈が遅浮弱で悪寒や悪風があるのに下すということがそもそも間違いだからね。それで下したために「食する能わず」、そして「脇下満痛」だから脇の下が非常に張って痛い。いわゆる胸脇苦満のような状態になってくると。それから顔も身体も黄色くなって黄疸をおこすと。それから首から首筋にかけてこわばると。それから小便が気持ちよく出なくなる。こういう場合は小柴胡湯を与えるといいと。それから「後必下重」・下重とは下腹が張って便が出そうで出ないことで渋り腹のことだから、あるいは今の医学の言葉で言うと裏急後重で大便が出たいようでもうまく出ないようなことを指す。

「本渴而して飲水嘔者〜者歳」・本と渴して水を飲んで嘔する者は小柴胡湯を与える証ではない。こういう場合に食事を与えるとしゃっくりが出るようになるんだと。本と渴して水を飲んで嘔する者は五苓散などの証であると。だから「〜後必下重」の所で切って読まなければ意味が通じない。

○第六条

傷寒にかかって四〜五日たって小柴胡湯の証になった場合、「身熱悪風」・身熱というのは体には熱があるが悪風や悪寒を伴わないのをいう。例外もあるけれども普通表証は取れている。太陽の表証があれば悪風や悪寒があるがそういうものが取れている状態を指す。

首筋がこわばって脇腹が張ってそれで手足は温かいと。そしてのどが渇く場合は小柴胡湯の証だと。

○第七条

傷寒にかかって「陽脈洪」とは脈を軽く抑えてみてははっきりしないでどこかで引っかかっているような弱い脈を打っている。「陰脈弦」とは強く抑えてみるとつっぱっているような脈を打つと。そしてこういう場合は腹の痛いのが当然であると。急に腹がつっぱってきて痛くなる。もしこういうふうな場合は小建中湯の証だと。小建中湯の脈だという意味だね。もし小建中湯を使ってみて治らなかつたら、あらためて小柴胡湯を与えればいいんだと。小柴胡湯の脈だったら脈弦細だが脈洪とは体表を守る力が弱い脈である。だから小柴胡湯も小建中湯も共に腹痛がある場合に使う処方であって、小建中湯を使って治らない場合は小柴胡湯を使うとなっているが実際には先に小柴胡湯を使ってその後で小建中湯を使う場合があってもいいわけだ。脈証によって使い分ければいいんだ。

○第八条

傷寒でも中風でも柴胡の証がただひとつあったらいいんだと。全部なくってもいいんだという非常に都合のいいことが書いてあるんだ。それで湯本先生が大柴胡湯や小柴胡湯をあらゆる病人によく使ったんだよ。柴胡湯の証がひとつでもあったらいいんだから胸脇苦満の証がひとつあったら、あるいは往来寒熱や、黙々飲食を欲せずでも心煩喜嘔でもひと

つあったら柴胡剤を使ったんだ。ことごとく備わらずともいいんだというんだから都合のいい条だけだね。一般雑病の場合ではなくて傷寒、中風などの熱病の場合はこのような考え方が出来るんだ。ことに子供ね。小学校に行くか行かんかの子供や乳幼児には非常に多いんだ。小さい子供は容態を言わんのだ。聞いたってわからんしな。わからんけど小柴胡の証は非常に多い。

○第九条

「凡そ柴胡湯の病証で面してこれを下し。」となっているが、もし医者が過って下したのであれば「医これを下し」とか「返ってこれを下し」とかいうけれど、ここでは単に下したとあるから誤治ではないわけだ。たとえば大柴胡湯なんかの証があって下してもいいわけだ。だから柴胡湯の証があって下すんだ、この場合は。誤治ではないんだ。ところが大柴胡湯の証があって下したけれども依然として柴胡の証が止まない者がある。この場合柴胡の証とあるのは小柴胡湯でもいいんだ。一般に柴胡湯と書いてあるのは小柴胡湯と考えていいんだ。そうするとね「必ず蒸蒸として振るい、かえって発熱して汗出て解す」となるがこれはおもしろいんだ。たとえば柴胡の証を下剤を使って下しておいて、

テ - プ ケ ッ ラ ク

○第十条

「太陽病。過経〜」・過経というのはね、太陽から厥陰まで一回りするのに十二日かかるという考え方がある。十二経を病気が一通り通り過ぎるという意味だけれど、もちろんこれは傷寒論の本文ではなくて後人のものでしょう。太陽病にかかって一通り経絡を病気が通り過ぎてしまったと。それで「反って二〜三これを下し」でも治らない場合・・・だから太陽病には腑病と経病があるという考えがあるのよ。葛根湯とか桂枝湯とか麻黄湯とかは太陽病の経の病気であるわけだ。そういう経の病気は汗を出して治さなければいけないわけだよ。太陽病でも病気が腑に入ってくれば、たとえば「熱膀胱に結び云々」という条文で始まる桃核承気湯なんか太陽の腑の病気になってくるんだ。だから発汗すべき経の病気を二〜三下したということだから、そういう意味で「過経十余日」という条文を入れているのだと思う。

太陽病で医者が間違っ下して四五日たっても、まだ柴胡の証があった者は小柴胡湯を与える。「過経十余日」という条文はのけて考えた方が意味がよくわかる。

太陽病で始まるから下してはいけません。で「反って二三これを下し」というから間違っ医者が下した。次に「後四五日」とあるが後の字が入るとすでに太陽病の証はなくなってという意味だと言ったでしょう。それでその後に柴胡の証があれば小柴胡湯を与えれば吐き気の証はなくなるはずだけれど、吐き気が止まらずに「心下急」とはみぞおちがつまった感じで「鬱々微煩」だから何となく気分が晴れないで、気分が悪くて胸苦しい場合は「未だ解せざると為すなり」・これは治っていないから大柴胡湯を与えて下せばいい

いんだと。

○第十一条

「傷寒十三日解せず」の十三日は前条の過経十二日を受けて十二の経を過ぎてからという事で同じ意味だろう。だから傷寒にかかって十三日を過ぎても治らないで胸脇苦満し嘔し、「日晡所潮熱を發し」・夕方が来ると潮熱を發すと。潮熱というのは熱が出た時に体中から汗が出てくるのをいう。この場合には寒けは普通ない。また潮熱というのは陽明病の時に出る熱感ということにもなっているけど、この場合は夕方になると熱が出てくる。しかし「已にして微痢する」・その前から軽い下痢の状態はあったんだと。これはもともと柴胡湯の証であったのに医者がこれを下して・たとえば大柴胡湯の証で大柴胡湯を与えたがその時には下痢しないので医者が「知るに医、丸薬を以てこれを下す」・備急円のような丸薬の下剤で下したと。丸薬というのは巴豆の入った下剤のことだ。だから備急円のような丸薬で下した下痢であると。「その治に有らざるなり」・適当な治療ではなかったんだと。そして次に「潮熱する者は実なり」・潮熱していても下痢する者は実証だという意味だ。というのは巴豆は熱薬で大黄は寒薬であるから、大黄で下した場合は熱が取れるけれども、巴豆のような熱薬で下した場合はおなかの中の内容が下るだけで消炎作用がないために熱が取れないわけだ。ちょうどヒマシ油で下したと同じ理屈だ。ここでは丸薬で下したことが間違っていたんだと。潮熱している者は下痢をしていても実証だと。

潮熱している者は下痢をしているからといって陰証と間違っはいけないんだと。これは医者が大柴胡湯で下痢しないからといって巴豆剤の丸薬で下したからいけないんだと。こういう場合はまず小柴胡湯を与えるのが順序だというわけね。小柴胡湯で表症が取れたら柴胡加芒硝湯と。柴胡加芒硝湯は小柴胡湯に芒硝という説と大柴胡湯に芒硝という説があるけれども小柴胡湯に芒硝でいいと思いますね。こういうことです。

ここでは患者のいろいろな病気の症状ではなくて、医者の治療の結果でいろいろな症状が変わってくるということを知らなければいけないね。漢方の治療をやっていて大事なことは、たとえば十二指腸潰瘍や胃潰瘍の患者の舌を診るとからからに乾いているんだよな！それで「あなたのどが渇きますか？」と言えば「とても渇きます」と言うんだよ。それをうっかり石膏の証と間違えることがあるんだよ。それは潰瘍の薬でロートエキスなどが入っている場合にはのどが渇くんだよ。そういう場合は薬の為の口渴だから気をつけなければいけない。のどが渇くからといって「はい」といって石膏などをうっかり使うとえらい目にあう。そして「下痢をします」と患者が言っても他の医者が下剤を使っていれば下痢をするのは当然だからね。ここで大事なのは医者が今までどういう薬を使っていたかということに注意する。ことに口渴をおこす場合や、血圧が高い患者でうんと身体がだるいという時に降圧剤によって血圧が下がり過ぎている場合があるんだよ。そうして動けなくなっちゃうんだよ。・・・どんな手当てをしているかということが漢方の証をつかむ

上においては非常に大事なことで、やはりよく患者に聞かなければいけないよな。

○第十二条

これはね、こうゆうことは案外あるんだよね。風邪ひいている時に後から月経がくる場合と、月経があるうちから風邪ひいた場合と両方あるんだよね。これは熱が下がらないわけだよね。往来寒熱があつて七八日たつて、それまであつた月経が止まって熱が下がらないで下痢する場合は、「熱が血室に入った」為であると。マラリヤのように熱が出たり引いたりするから小柴胡湯を使わねばいけないと。「血室」というのは子宮という説があるがそうではなくて肝臓と考えた方がいいだろう。男の場合にも「血室」というのが使つてあるから。男には子宮はないからな、どうしたつて。体の中で一番血の多いのは肝臓だから。そう考えた方が小柴胡湯を使うにもいいと思う。

○第十三条

「傷寒で五六日」たつてから、頭から汗が出ると、体には汗は出ない。首から上に出ると。それから寒けがして手足が冷え、みぞおちのところが張つてあまり食べたくない。大便秘結はしないで難く、脈は細脈だと。こうゆう場合は半外半裏だと。そして「此為陽微結～此為半在裏半在外也」までは後人の付け足した注釈だからね。これは陽のめぐりが悪くなっていると。そして脈が沈であると。そしてこれも陽微であると。「純陰結」とは裏の働きもうまく行かないで結帯していると。そうするとこれは病気の半分は裏にある

が半分は外にあるんだと。半外半裏だというんだね。脈は沈緊であつたとしても、少陰病では沈緊の脈のことがあるけれども、ここでは脈が沈緊であつても少陰病ではないと。少陰病であれば汗が出ないはずだけれども、ここでは汗が出て脈が沈緊だから少陰病ではないと。少陰病のところに出てくるけれど汗の出る少陰病もある。しかしそれは非常に重傷のときで悪い症状なんだ。それでここでは小柴胡湯を与えたらいいんだと。

もし小柴胡湯を与えてさっぱりしなくても、その後で大便が出さえすれば症状はよくなるんだと。これは下剤を使えという意味ではないと思う。小柴胡湯を使つてお通じがあればさっぱりするという意味だろう。ここはごちゃごちゃと書いてあるけれども「微惡寒、手足冷、心下滿、口不欲食、大便難、脈細者」は小柴胡湯を与えるべしでいいんだよ。

だからこういう場合が陰証との区別が難しくなるんだよね。だから「故知非少陰也」と書いてあるんだ。

○第十四条

この条は小柴胡湯と大陷胸湯と半夏瀉心湯の区別が書いてあるんだ。

「傷寒五六日、嘔して発熱する者は、小柴胡湯の証が具わっている」んだと。だから小柴胡湯を使えばいいのに「他薬を以て此を下し」それでもなほ「柴胡の証がある者は、また小柴胡湯を与える」と。「これ已に之を下すといえども、逆と為さず」というのは、たとえば小柴胡湯の証を大柴胡湯で下した場合には、逆治としないでいいんだと。しかし下し

た後に小柴胡湯を使うと「ふるふる振るえて」、「かえって発熱し汗が出て解す」というような治り方をするんだと。だから柴胡の証を大柴胡湯を使って下しておいて、小柴胡湯を使って治る場合は、うんと寒けがして振るえるようになって発熱し、汗が出て治るんだと。「もしこの場合にみぞおちが張って痛い者は結胸だ」と、これは大陷胸湯の主治だ。みぞおちが硬くなっているのよね。しかし「ただ満して痛まない者は、これを痞と為す」とあるのは心下痞だから柴胡剤を使わないで半夏瀉心湯がいいんだという意味だ。

結胸のようにみぞおちが石のようにうんと硬くなっている者は大陷胸湯で、ただみぞおちが痞えるだけならば半夏瀉心湯で、嘔して発熱したのを柴胡剤で下すか、あるいは他の薬で下しても、他薬を以てこれを下しても、柴胡の証が依然と残っておれば柴胡剤を使えばいいんだと。こういうことが書いたあるんだね。

○第十五条

「陽明病」と書いてあるのは次に「潮熱が出る」とあるので陽明病にしたのでしょう。それで「大便が溏」とは大便がゆるいわけでしょう。「小便自可」とは小便が気持ちよく出るという意味です。だけれども「胸脇満去らざる者は」とは胸脇苦満が去らなければ小柴胡湯を使うと。ちょっと陽明病に似ているけれども「大便溏、小便自可」というのがあるから小柴胡湯を使うんだと。

○第十六条

この条は陽明病で便秘する場合のことを述べている。陽明病というのは便秘したり潮熱が出たりするでしょう。だけど陽明病のようだけれども脇下硬満だから、脇腹の下が硬く張って大便が出ないで吐くと。陽明病に似ているけれども陽明病は普通吐くという症状はなくて「舌上白苔者」・舌に白い苔が付くんだと。陽明病の時に付く白苔はちょっと乾燥気味ですね。そういう場合は小柴胡湯を与えるべしと。そうすると「上焦通ずるべし」と。傷寒論でいうところの上焦とは胸部の剣状突起より上の部分をさし、中焦というのは臍と剣状突起の間をいい、下焦というのは臍から下の部分をいう。ここでは上焦だから上の部分がふさがっておった。小柴胡湯というのは胸の詰まったようなのを疎通する働きがある。小柴胡湯によって上焦の気が通じて「津液下るを得る」・津液とは体液ね。体液が下に下って胃の働きがよくなって汗が出て治る。

ここでひじょうに面白いのは、小柴胡湯を使ってね、便秘が治ることはよくあるのよね。ここでは汗の出る場合だけれども。そして「胃気より和し、身しゅう然と汗出て解す」とあるように「胃気より和し」大便が通ずるということはあるんだよ。ことに子供の便秘には大黃を使わなくても小柴胡湯を飲ませると毎日便通があって食欲が出るというようになる。下剤を使わなくてもいい場合があるんだ。

○第十七条

「陽明の中風」と書いてあり、脈が弦で浮大で、呼吸が促迫し、腹が張って、脇腹が痛

いと。そして「之を按じ」の之はみぞおちでしょう。みぞおちから脇腹を按じて「氣通ぜず」というのははっきりわからないけれどね、どういうふうに解釈したらいいか？「鼻乾いて汗を得ず」鼻が乾燥して汗が出ないと。「嗜臥」とは起きて働くのがいやで寝ていたいと。ところが体を診ると黄色くなっていると。そして小便も出が悪いと。だから急性肝炎の状態が考えられるわね。そして時々しゃっくりが出ると。「耳前後腫れ」とあるから耳下腺あたりが腫れるわけでしょう。「刺之少差」とあるから鍼で治療すれば少しよくなる。けれども「外解せず」だから外証が治らないで病気が十日以上たつて脈が浮いていて沈んでこなければ小柴胡湯を与えていいんだと。しかし脈が浮細とか浮弦とかでなくただ浮だけで他の症状がない時には、たとえば「脇下及び心痛」とかがない時には麻黄湯でいいんだと。もし小便が出ないで腹が張ってしゃっくりが出るような者は予後が余りよくないんだと。これは急性肝炎だと思えば意味がよくわかるでしょう。

腹が張ってみぞおちが痛くって黄疸をおこして小便の出が悪くなる。中耳炎とか耳下腺炎とか、耳のあたりのリンパ腺炎の腫れにここの条文をヒントに小柴胡湯を使うのよね。

○第十八条

「もと太陽病解せず、転じて少陽に入る者は～」これは太陽病から少陽病に邪が入った場合ね、そうすると「胸下硬満」脇の下が張って硬くなって「乾嘔して食すること能わず往来寒熱」すっかり小柴胡湯の証が出てきたわけだ。この場合に「なお未だ吐下せず、脈沈

緊の者は小柴胡湯を与え」医者が出せたり下したりせずに脈が沈緊となるとは、太陽病から陽明病、少陽病に病邪が入った時の典型的な症状ね。「もし已に吐下し、発汗し、温鍼し譫語する者は、柴胡の証やむ」。温鍼というのは焼きばりのことで汗を出す方法ですがそれらのことをして後に譫語する者は小柴胡湯の証ではない。この場合は壞病だからどうゆう間違いを犯したかを診断してそれぞれの治療をするわけね。「犯すに何の逆を知って」というのは下したか吐かしたか発汗したか温鍼したかということを行い、たとえば温鍼なんかでこうなれば火逆の証だから桂枝甘草竜骨牡蠣湯などだから、どうゆう間違いをしたかによって治療法も判断していくということね。

○第十九条

「嘔して発熱する者」とは熱の出る前に吐いて、吐いてそれから熱が出るという意味だと、だから湯本先生は先に吐いて熱が出たらみな小柴胡湯と言っていたけどね。そこまで言ったら言い過ぎだと思うけど子供はよくある。吐いてから熱が出るということが、そして小柴胡湯をやるとよく効くことがある。あんまりこれにとらわれてしまうとまた困るけどな。そういうことがあるよ。

○第二十条

「傷寒癒えて後」だから、もう傷寒が九分どうり治った後でまた病気がぶりかえってくる場合これは小柴胡湯というわけだ。病気がだいたい治っておって、ちょっと早く動き過ぎ

たとか無理して熱が出た場合に小柴胡湯の証があるということだ。ところがこの場合に脈が浮いておって胸脇苦満とか食欲不振などが無い場合には桂枝湯とか麻黄湯とかで治す。ところが脈が沈の場合はこれは下して、下す場合は調胃承気湯を使う場合もあるし大承気湯を使う場合もある。それはその時の状態によってちがうわけだ。それで治せばいいわけだ。それでたいてい脈沈で熱が出る場合は食べ過ぎている場合が多いんだよな。

○第二十一条

「諸黄」とは身体が黄色くなる病気で「腹痛して嘔する者」腹が痛んで吐く者は小柴胡湯がこれをつかさどる。しかしこれだけでは無理だ。たとえば茵陳五苓散や茵陳蒿湯だってこういう状態はあるもんな。この条文から金匱要略の条文になる。

○第二十二条

「問うて曰く、新産婦人に三病あり、一は瘧あり」瘧とは今でいう破傷風だ。「二は鬱冒」鬱冒とは鬱病だ。めまいがしたり頭が重かったりね。冒とは頭にもものをかぶってる状態ね。「三は便秘」と。それに対して先生の言った言葉が、今日の医学の立場から考えるとおかしいけれど、新しいお産をしたために血が非常に減って汗がうんと出て、その上に風邪にあたった為に破傷風になったんだというわけだが、今日では破傷風菌が入ったというわけで昔はそうゆうふう考えたということだろう。それから「亡血してまた汗が出て寒けが多い」になるんだと、それから「津液が失われて胃腸の中が乾燥するから大便が硬く

なるんだ」と。それから「脈が微弱で吐いて食べれない」と、ところが「大便のほうは硬くて頭だけから汗が出る」身体には汗は出ない。そういうような者は「血虚して厥する」血虚とは貧血だ。そして手足が冷たくなると頭にもものをかぶっているようになるんだと。そして治る時には汗がうんと出る。これは貧血して足の方が非常に冷たくなるために上の方に陽が上って、上へ血が上っちゃってのぼせたようになる。足が冷えて顔が上気したようになる。今日でいえば血の道症のようなもので足が冷えて頭にもものをかぶっているような状態ね。「故に頭汗いず」と、「産婦しばしば汗出ずるものは、陰を亡ぼし血虚する」と、だからうんと血が出たために血虚して、陽の気だけが上に上って陰の気が下に下がって「故に汗出でしむ」「陰陽が調和すれば治るんだ」と、しかし陰陽が回復する治療方法はここには書いてないんだよね。「大便が硬く、嘔して食すること能わざるものは小柴胡湯がつかさどる」「病が解してよく食して、さらに発熱する者は大承気湯の証だ」と。破傷風の場合と血の道の証の治療に何を使うかということがここに書いてないわけだね。

○第二十三条

「婦人草蓐にありて」草蓐とは産褥だ。昔はお産する時、家の中でしないで外に出て草を敷いて子供を産んだからそういうそう。寒い時は大変だよな〜。「自ら発露して風を得」お産する時にばい菌が入る、風というのはばい菌だ。そして産褥熱が出るんだ。これは産褥熱の治療を述べてあるから。熱が出て手足が非常にほてって煩熱に苦しんで頭痛する

者は小柴胡湯」だけれども「頭が痛まなくてただ煩熱する者は三物黄芩湯」というわけだ。それで私は産褥熱の時に三物黄芩湯を使ったことがあり、すご〜くよく効いたことがあるんだ。女子医大に入院している患者で、うちの患者さんだったが入院してお産したら

○第二十三条

「婦人草蓐にありて」草蓐とは産褥だ。昔はお産する時、家の中でしないで外に出て草を敷いて子供を産んだからそういうそう。寒い時は大変だよな〜。「自ら発露して風を得」お産する時にばい菌が入る、風というのはばい菌だ。そして産褥熱が出るんだ。これは産褥熱の治療を述べてあるから。熱が出て手足が非常にほてって煩熱に苦しんで頭痛する者は小柴胡湯」だけれども「頭が痛まなくてただ煩熱する者は三物黄芩湯」というわけだ。それで私は産褥熱の時に三物黄芩湯を使ったことがあり、すご〜くよく効いたことがあるんだ。女子医大に入院している患者で、うちの患者さんだったが入院してお産したら

つづき

40度位の熱が出て下がらないだよな。それから浮腫んで、往診を頼まれてその時に三物黄芩湯を使ったことがある。今日はこの位にしておこう。何か質問があったら聞いておこう。

(余談) 中将湯の高橋さんが血圧が高いんで心配しているんだよ。高い時には230もあるんだよ。だから休みなさいというんだけど休まないんだ。あそこはあんたで持っているんだから休めと言うんだけど忙しいといって休まないんだ。誰だって忙しいんだよ。だからこの前山田に電話しておいた。社長に言って高橋さん休ませるように言ったんだが休まないんだ。

沢瀉湯

方極文：

第一条：

標注文：

大塚：沢瀉湯というのは非常に組み合わせが簡単だけどね。だいたい組み合わせの簡単な処方では急に来てうんと劇しい症状に使うんだよね。例えば芍薬甘草湯なんかはものすごい痛みに使うんだよね。めまいでも五苓散だの当帰芍薬散でも沢瀉と朮は入っているからめまいに効くことは効くよ。効くけどね、ここに書いているようなものすごくひどい急激に来ためまいには沢瀉湯でなけりゃあ効かないんだ。だから立ちくらみではないんだよ。寝ていても目がくるくる回ってね、うんと劇しいめまいであって此の処方でなけりゃだめなんだ。うんと劇しいこらえられない腹の痛みには芍薬甘草湯の方がいいんだよね。桂枝加芍薬湯なんかではだめなんだ。2～3日前に来た何とか知子、リウマチの患者で山下知子か。この患者にはいろんなことをして治らなくて困った患者だったんだ。ところが甘草附子湯をやったら治ってしまったんだよ。全然痛くないし血沈も普通になったし。喜んでいるんだ。甘草附子湯は甘草と附子と朮と桂枝、それだけだろう。組み合わせが簡単なのが劇しい症状に効くんだ。あれはたくさん入れるとかえって効かなくなるんだ。桂枝加苓朮附湯にはその組み合わせは全部入っているわね。けれども組み合わせが複雑になると病気は長引いても症状はそんなに劇しくないんだ。うんと症状が劇しい状態で来た場合にはやっぱり四つか五つくらいの簡単な組み合わせの処方がよくて十とかそれ以上の組み合わせの処方では効きめが弱いね。だからここでは目をつむって寝ていても体が揺れるし体が宙に浮いたようになるわけだ。この中ではやっぱり沢瀉が主になるから。沢瀉というのは頭にものを被っているような症状でそしてめまいがする時に使い利尿作用が朮より多いんだね。『心下に支飲有り』というけれども、みぞおちをたたいてみてジャブジャブ水の音がしなくてもそれはかまわん。それは問題にしなくてもいいんだ。

茯苓沢瀉湯

方極文：

第一条：

為則案：

標注文：

大塚：この反胃とか胃反とかいう意味は食べたものを受けつけないで吐いてしまうことで胃がひっくり返ったということだから。もちろんここでは胃癌なんかで吐く場合も指している。だけれども胃癌でなくても吐くことは有るんだから胃反がすべて胃癌だというわけにはいかないよな。胃拡張なんかでも胃反の症状が有るからね。胃拡張は朝食べたものを夜吐くとか夜食べたものを翌朝吐くことが有る。でも幽門に癌が有ると胃拡張になるんだ。幽門に癌が有るとものが下がらないから胃が拡張するだろう。どちらにしても重い病気であるわけで癌でなければいいけど癌であったら難しい訳だ。だから標注に『胃反は、もとより治し難きの症。此の方のよく治する所に有らず』と。一時的に吐いたりのが渴いたりするのは効くけれども癌であれば治らないと。『心下或は臍上に疔+徵結有り』というのはツモールが有るということだ。『大筋』というのは腹直筋のこと。腹直筋がへその両わきにあって、それが『上下にあって胃府の消化を妨げる』と書いてあるけれど、これはおなかにツモールが有ることを言ったんで、腹直筋が妨げることはないと思う。『回虫によって吐くことが有る』これはいいわね。私が茯苓沢瀉湯を使って前によくしたのは男の人でとにかくいろいろなことをやったがだめで、朝の食事を夜吐くし夕飯を翌日吐くという状態だった。ひどくのが渴いて水を飲みたがる。飲むわりに小便が出ない。というのでこの処方を使ったらしばらく調子がよかったが、やはり幽門に癌が有ったらしくまた悪くなってぼっと死んじゃったけど。一時はよくなる。五苓散とよく似ているんだ。五苓散の場合は飲み込むと吐く、そしてまたのが渴いて飲むと吐くということだけれど、これはそうじゃなくて、朝食べたものを夕方吐いたりして飲み込んで吐くまでの間に時間が有るんだよね。五苓散の場合には一分か二分の間に飲むと吐く、吐くとまたのが渴いて飲む、それを繰り返すわけだ。もう一分もかからないくらいで飲めばすぐに胃に入ればすぐに吐くんだよね。これは癌なんかではなくて子供に比較的多くて一服か二服で治るよ。茯苓沢瀉湯はすぐには吐かない。五苓散と違うところは甘草と生姜が入っているわね

。そして猪苓がないんだよ。非常によく似ているけれど。

茯苓甘草湯

方極文：

第一条：

第二条：

為則案：

標注文：

大塚：ここでは五苓散との違いはのどが渴くと渴かないとの違いなんだよね。のどが渴けば五苓散。渴かなければ茯苓甘草湯というわけ。第二条で『厥』とあるのは手足が冷たくなるんだ。手足が冷たくなって動悸がするんだ。その場合にまず水毒を治さなければいけない。そして手足の冷たいのを治さないといけない。水を治することをしなかったら『水瀆』これは「すいし」と読んだらいいだろう。そして水は胃の中に入って下痢になる『利』というのは下痢のことだ。此の茯苓甘草湯という処方簡単な処方で大したものが入っていないけれども、これは附子の入っている証と区別がつかなくなることが有る。真武湯の証と間違えることが有る。非常に冷えるんだよね。冷えて動悸がして小便の出も悪くなるんだ。小便がとにかく出なくなるんだ。だから欄外に書いてあるように『小便不利等の症を脱するに似たり』で小便不利の証が有るんだよ。書いてないけどこれは五苓散との区別だから、五苓散では当然小便が出ないから。のどが渴いて小便が出ないのが五苓散でのどが渴かないで小便が出ないのが茯苓甘草湯なんだ。小便が出ないことでは同じだから。だから非常に手足が冷えて動悸がして小便が出ない症状が有る。昔昭和八年頃に矢数君の弟で矢数有道君という人がいて、すごい秀才で頭がよかったがすごい神経質だった。で腸チフスになって東京医専の先生で黒という先生がいてその黒病院に入院するんだよ。兄さんも雇って二人が入院するんだよ。それで一番上の格先生が「僕は急性病の治療は苦手だから大塚さん来て診てやってくれないか」と言うんだ。その時初めて矢数君に会って交際が始まるんだよね。その時に道明君はチフスではなくて熱が四五日で下がって退院するけれ

ども有道君は本当の腸チフスでね。四十度位の熱が出て下がらないし、それで体力も弱るからということで昔のことだからリングルだ。食塩水を注射したらそこがふくらんだきり吸収しないんだよな。それで有道君は非常に神経質だから「心臓が弱って注射した薬を吸収しないんだったら俺はもうだめらしい。動悸がし出した」と言うんだよね。そして足が非常に冷えてくる。手足が冷えて動悸がしてきたから至急私に来てくれと言うから行ったんだ。それで病院に行ったら顔を見るなり「附子の証になりましたよ」というんだ。それで私が診て「これは附子の証ではなくて茯苓の証だよ。茯苓甘草湯だよ。茯苓甘草湯で小便が出たら治るよ」と言ったんだ。有道君は「真武湯かなと思ったんだが四逆湯かな」なんて言っとうろたえていたんだ。でこれを服用させたんだ。服用させてじっと様子を見よったんだ。そしたらえらいもんだね～三十分位したら膨れていた場所が吸収されてきれいになくなってしまったんだよ。そして本人は「よかったー」としゃべってね。それから汗が出るんだ。そしてそれっきりさ。それっきり動悸もおさまって非常によくなったんだ。他にもチフスの患者は多く入院していたけれど有道君は速く治って退院したんだ。それから私と矢数君との交際が始まるわけだ。茯苓甘草湯を使ったことがきっかけなんだ。だから附子の証に間違えることがあるから気をつけなければいけないんだ。それにしても矢数有道君という人はすごい秀才だったからね。その時にはチフスは治ったけれどね、それから中国に行って中国の奥地で終戦を迎えるんだ。酒が好きで支那人の漢方の医者の方にしゅっちゅう行ったらしんだ。そこでごちそうになって飲み食いして漢方の話しをしているうちにまた腸チフスになっちゃうんだよね。それでどうもよくないから真武湯を飲んだらしんだ。けれどだめでとうとうそこで死んでしまうんだよね。そうゆういきさつがある。だからチフスの型が違うらしい。日本で流行ったのは昭和八年だろう。矢数君が死んだのは昭和二十年だから。同じチフスの菌であれば免疫力が有るはずだけれどもだめだったわけだから違ったらしいな。急性病を扱うとこうゆう面白いことに出くわすが慢性病ではこんなのはないよね。三十分位で熱がスーと引いたなんていうことは、そうゆう面白さはなくなるよ。急性病では劇的な例が出てくるけれども。子供で病院に入院して吐いて吐いてリングル打とうが何をしても治らないようなのが五苓散を一服飲ましたらスーと治るもんな。あざやかなもんだから医者もびっくりするけどね。こっちは初めから一服で治ると思っているから驚かないけどね。医者や患者さんはびっくりするよ。じゃあ五苓散を読んでごらん。これはすこし難儀するよ。

五苓散

方極文：

第一条：

第二条：

第三条：

第四条：

第五条：

第六条：

第七条：

第八条：

第九条：

標注文：

大塚：太陽病の段階で葛根湯とか麻黄湯で発汗するでしょう。これは西洋薬のアスピリン等で発汗しても同じで発汗剤を使って汗が出て『胃中乾き』というのはこれは想像のこと。『煩躁して眠れず』とあるのは五苓散の証ではじっとして寝ておれなくて苦しいだよな。だるくて苦しくて子供なんかでは蒲団から転がり出て静かにして寝ていないんだよね。子供に多くて、例えば子供に風邪だからということで葛根湯を使って汗が出る。そうすると今度は非常にのどが渇いてくる。そしておとなしく寝ておれなくなる。水を飲みたがる。そうゆう時に少しずつ水を飲ますとそれだけで眠りがついてくる場合がある。要するにこれは『胃中が乾く』んではなくて血液中の水分が少なくなるわけでのどが渇くわけだか

ら、のどが渇くけれどもそれは胃壁から血液中に吸収するだけの力がなければ水を飲んで血液の中に入らないわけだ。この場合には飲めば血液の中に入る場合で次の条と違う。水を飲んで吸収されれば体も潤ってくる。潤ってくれば小便も出るし熱の有る場合に汗も出る。要するに汗が出ようにも血液の中の水分が欠乏しているから小便になる材料もないということ。飲んでそれが吸収されれば小便にもなるし気分も落ち着いて眠れるようになるわけだ。だから『胃気云々』というのは胃の気の働きを鎮めてやればよいということね。それでまた脈が浮いて小便が出なくて熱が有ってのどが渇く者もこの五苓散でいいと。この場合にここには書いてないけれども脈は浮いて速い場合が多いんだ。次の第二条では発汗剤を使って汗が出る。汗が出ると血液中の水分が汗になって出るから少なくなってくる。それでのどが渇く。それで熱が有るから脈が浮いて速い。これに五苓散を使うと飲んだ水が胃の中から血管中に吸収されていくんだ。これはごく軽い場合には五苓散でなくて水だけで治る場合があるけれどもすこし重くなってくると五苓散を飲まなければいけない。この違いですね。西式健康法の西さんの本に水はしっかり飲まなければいけないということが書いてある。理由は傷寒論にもこの条文が有るというんだ。しかし傷寒論では『水を飲もうとする者には、少々これを与えよ』と書いておるんで西さんはこうゆう勝手なことを書いてね。傷寒論にも書いているからというんで見てみたら『少々之れを与えて飲ましめる』とあるんで『少少』というのはそんなに多く飲ませるという意味ではないからな。第三条はここに書かれてあるとうりです。第四条での『表裏の證』というのは頭痛がしたり熱があつたりで『裏證』は吐いたり下したりすることが裏證だ。『渴して水を飲まんと欲す。水入れば則吐す者』とあるから水をすぐに吐くわけだ。『名づけて水逆という』水逆というのは上にも吐くし下にも下すという意味だがほとんど吐くことのほうが多くて下すことは少ないけど、下痢も両方有ることになっている。このような場合に五苓散で吐くことも下痢することも一服で止まる。これは五苓散を粉にして重湯で服用させたら非常によく効く。煎じ薬でもいいけど。粉にして重湯にして服用させれば飲む方も楽だし。渡辺宏和君が三才頃だったかな。風邪をひいて熱があつたから葛根湯を飲ましたんだって。そしたら吐いて吐いて受けつけなくってごろごろして苦しがつておるんで来てくれというから「お前ね、それは五苓散の証に決まっているんだから五苓散をこさえて飲ましてみよう」と言っておいたんだ。そしたら「五苓散を飲ましたけれど止まらない」と言うから「そんな馬鹿なことはない」と言ったんだ。そしたらね、五苓散全部をね乳鉢に入れてこすったらしいんだ。沢瀉や茯苓はすぐに粉になったらしいんだが猪苓なんかは粉にならず、

それぞれの比例がめちゃくちゃよ。これは別々にして粉にして後で合わせばいいんだよね。一緒にやったもんだから桂枝や沢瀉はいいけれど猪苓なんかは粉になりはしない。それでどうしたかと言うと「滓が残った」と言うから「それは猪苓と沢瀉が大事なのにめちゃくちゃじゃないか」と言ってやったんだ。「それじゃ間に合わないから煎じて飲ませてみい」と言ったんだ。そしたら一服飲ましたらすっと治ってしまったんだ。それから彼は五苓散の使い方を覚えたんだよ。五苓散を飲ましたらすぐにのどの渇きが止まってね、三十分位したら汗ばんできて汗が出てそれから小便が出て治っちゃったんだよね。私が五苓散は粉がいいよと言ったんでやったらしいけれどもそれじゃあ無理だよ。朮と猪苓が粉になりにくいんだよ。やはり矢数圭道君が子供の時に吐いて下してやはり診に来てくれというんで行ってみたらやはり五苓散だ。ダーと水を吐くしそれで五苓散を飲ましたら一服でよくなって驚いておったやはり。一回使ったらもう忘れんよ。見事なもんだから。第五条『病陽に有りて、当に汗を以て之れを解すべし。反って冷水を以て之れを__（ふ）く』

『__（ふ）く』というのは口に水を含んでおって顔に吹きかけるような意味だ。『灌ぐ』というのは水を注ぐという意味だ。要するに冷たい水で冷やすわけだ。熱が出た時等に氷枕のようなもので頭を冷やすようなこと。あまり寒けのする時は冷やさない方がいいと。

『熱が劫かされるから去ることを得ず。いよいよ更に益々煩し、肉上が粟起し、おもうに水を飲まんと欲す』とあるわけね。五苓散は使いやすいよな。のどが渇いて小便が出ないと使えるからね。けどね五苓散の証でのどの渇かないこともあるんだよね。小便もそんなに少ないわけでもないことがあるんだよな。そうゆう時に困るんだよな。

吉本：いろいろな使い分けというのが有るみたいですね。ここでは五苓散と小半夏湯の比較というのが上に出てきますしね。苓桂朮甘湯との比較も有りますし瀉心湯との比較も有りますね。難しいですね。

大塚：やっぱり自分で経験して比較をして区別しなければわからないよ。あんたたちはクインケの浮腫というのを見たことはないだろう。私が四十年間漢方やっていて二人しか診たことないから珍しいんだ。現代医学では治療法のない病気で例えばここだけぼつと膨れるんだ。その次には違う場所が膨れたりするんでどこという所なしに膨れ上がるんだ。ね。それは一週間や十日すればひくけれど持病になるんだよね。同時に頭痛がきて浮腫むんだよ。はじめ五苓散を使うことを知らないで防已黄耆湯だのなんだのと使ってみたけれど効かないんだよ。それで頭痛がするということで「ははーこれは五苓散かな」と思って五苓散を使ってみたら一日分でスーと腫れが引いて治っちゃったんだよ。やっとならでわかつた

たんだ。それからおばあちゃんに自動車で乗って来る・・何ていったかなあのおばあちゃんは？往診をよくしたあのおばあちゃんが若い時からクインケの浮腫なんだよ。やっぱり五苓散ですっと治ったんだ。それで皮膚の上が水ぶくれになっているのに効くだろうと思って带状疱疹に使ったらすごく効いたんだよ。びたっと痛みが止まるんだよね。今、北里で診ている患者で天疱瘡という病気が有るんだ。天疱瘡という病気は命取りでね、とにかく四十度位の熱が出て体中が水ぶくれになっちゃうんだ。そして予後が非常に悪くて現代医学的な治療法がない病気なんだよね。それにねこの前五苓散を使ったんだよ。その患者は死ぬほど重くはなかったけれど。そしたら五苓散が一番よく効くね。初め十全大補湯を使ったりね、いろいろやったが効かなくてね、やはり五苓散が一番いい。あれは水ぶくれになるんだよ。だから非常に応用範囲が広いよね、五苓散は。じゃあ次を読んでゆきましょう。『意水を飲まんと欲し、反って渴せざる者は、文蛤散を服す。若し差えざる者は、五苓散を与う』文蛤散のことについては問題が有る。欄外に出ているからその時にまた話そう。『寒実結胸』以下はこれの続きではなくて別個のもんだな。ここで切れなければいけない。『寒実結胸し、熱證無き者は、三物小陷湯を与える。白散もまた服すべし』ちょっとおかしんだよ、これは。『寒実結胸』というのは胸に悪い邪が充満して結胸状態になって熱はないと。寒が有って熱がないと。小陷湯だから黄連と半夏と栝蒌実でしょう。白散というのは桔梗白散だから巴豆と貝母（テープ中、大塚先生は杏仁とする=誤）と桔梗でしょう。ちょっとここは意味が通じないよな。ここは何かの錯換でしょう。第六条ですが医者が下した為にみぞおちが支えたようになって食欲が無くなって『心下痞』であったから瀉心湯を与えたと。しかし『心下痞』が治らない。胃の支えが治らない。そしてのどが渴いて小便が出ない。こうゆう場合に五苓散の証が有るんだと。だから半夏瀉心湯や三黄瀉心湯の瀉心湯類との鑑別のことを書いているね。普通、瀉心湯の場合の心下痞というのはそんなに『渴して口燥煩』という状態はないからね。第七条の『太陽病。寸緩関浮尺弱云々』は後人の注釈でしょう。だからこれは『太陽病。脈浮弱』の桂枝湯の証でいいんじゃないの。寸関尺で分けているけれど脈が緩・浮・弱であれば桂枝湯の証だもんな。それで熱が有って汗が出れば桂枝湯の証でしょう。だから脈浮弱で汗が出て微悪寒すると。そして吐き気はないと。桂枝湯の証と違うところは『心下痞』が有ると。これは医者が誤って下したからだ。もし医者が下さない者で病人が悪寒がなくてのどが渴く者は、これは太陽病から陽明病に入ってしまったんだと。で小便が回数が多い場合には結果として大便が硬くなる。『更衣せざることを十日』というのは大便をしないうこと。大便を十日もしない

のに別に苦しいこともない。でこれでのどが渴いて水を飲みたがる者は少しずつ水を与えて、ただ法を以て之れを救うと。のどが渴く者は五苓散の証であると。ここではちょっとごたごたしているけれども、太陽病の桂枝湯の証のような者を医者下し、みぞおちが痞えている者はこれは医者による誤治の結果そうになっている。その場合に悪寒がなくてのどが渴けばもう陽明病に入っているんだと。ところが小便がうんと近くて大便が難しいのに、普通だったら十日も大便が出なかったら苦しいけれど、苦しむところがないということは陽明に似ているけれども本当の陽明病にはなっていないわけだ。こういう場合にはのどが渴けば水を与えるし、よくならなければ五苓散を使うとうことだろう。ごたごたしているけれどそんなに大事なところでもないようだ。『霍乱』というのは嘔吐と下痢が劇しいのが霍乱だ。吐き下しをして頭痛がして熱が出て体が痛い。『体が痛い』というのと『頭痛発熱』というのは表証でしょう。『熱多く水を飲まんと思ふ者は』というのは裏証です。表裏の証が有るから『五苓散之れを主どる』となる。『寒多くて水を用いざる者は、理中丸之れを主どる』理中丸というのは人参湯を丸にしたもの。それで理中丸では水を飲みたがらない。五苓散の場合には熱が有って水を飲みたがるけれども。水を飲みたがらない場合には理中丸の証であると。この場合に『頭痛発熱。身疼痛』という症状が理中丸の場合にもあるかどうか？という問題が出てくるわけ。で、大人の場合にはね聞けばわかるけどね、三つか四つの子供に聞いたってわからないんだよ。見当つかないんだよ。だから前に私はね、三つくらいの男の子でしょっちゅううちに来る子で、急に熱が出て吐いて下痢もするし、板橋だったか往診に行ったんだが五苓散だろうか人参湯だろうか見当がつかないんだよな。脈診たって小さい子供だからわからないんだよ。わけはわからないんだよ。どうしたもんだろうと思っいろいろ考えたんだけど、下痢があるし五苓散であっても悪いことはないし人参湯であっても水を飲むでも飲まんわけでもないしと思っ結局人参湯をやってみたらそれっきりよくなったけれどね。子供にね頭が痛いかわからないかと聞いてもわからないんだよ。だからそういう時は、人参湯をやってみて効かなかったら五苓散をやろうと思っったんだよ。でも人参湯で治ってしまったんだよ。そういう区別は案外実際には難しいんだよ。次に『仮令』とあるのは『例えば』と読むが突然『例えば』というのはおかしい。何かの続きが有って『例えば』というのであればわかるけど。痩せた人でへその下で動悸があると。唾をさかんに吐いてそしてめまいがする。これは水であるから五苓散の証であると。この『癩眩』の『癩』のことに關して腹證奇覽だったか腹證奇覽翼だったかどちらだったか記憶が曖昧だが『水を見て発作を起こすのを癩癩』と言っている。ど

っちだったかな？『水癲癩』というのがあって、水を見ると癲癩発作を起こすというわけだ。我々でも水を見ることはしっちゃんあるんだからそれで癲癩を起こすというのはちっとおかしいけどな。これはそういう意味ではないと思うけどな。へその下でしきりに動悸がして水を吐く。そしてめまいがするというわけだからそれでいいと思うけどな。欄外では五苓散と小半夏湯の区別が出ているけれど、五苓散の場合には小便が出にくいのとどの渴きがあることだが、小半夏湯や小半夏加茯苓湯でも小便の出が悪いことがあるよな。しかしこのような口渴という症状はないのが普通だから。ただ吐かないでむかむかするばかりで、吐いてもその後がまだ吐きたいように思うような症状は五苓散ではないね。五苓散では吐きたくなったらバーと吐いて吐いた後はサッパリするんだよな。その後でまた水を飲みたくなってバーと吐くんだ。小半夏湯の場合はしっちゃん悪心の状態が続くんだよ。吐いても気持ちよくなってまだすこし残っているような感じなんだ。だから吐く状態と口渴によって区別つくと思うけど。私が田舎で漢方やっていた時にとりなりの村で肋膜炎で水の溜っている奥さんに往診を頼まれて行ったんだが、横になって寝ていると息が苦しいということで座っているんだ。横になると息が出来ないんだ。右だったか左だったか忘れたけれども水がいっぱい溜っているんだ。本人が注射器で水を取るのがいやだと言うのでとりなりの村の医者が利尿剤の酢酸カリウム（酢物液）を飲ましたらしいんだ。それは非常に飲みにくくて食欲を害するんだよね。あれを飲ましたら小便が出ないで吐き出すんだよ。吐き気が止まらなくなっちゃうんだよ。吐き気が苦しいので吐き気を止める目的で小半夏加茯苓湯を二百CC入りの瓶に二日分程煎じて渡すんだよ。漢方薬だとは言わずに。『これでも飲ましてみい』と言って。中一日たって行ってみたら寝てんだよ。『どうした？』と言ったら『先生！これを飲んだら十何回も小便に行った』と言うんだ。『とっても気持ちがよくなって寝れる』と言うから。吐き気は一服飲んだら止まったと言うんだ。のどが渴かなかったから小半夏加茯苓湯をやったんだ。それで診てみたら肋膜炎の水がきれいを取れてるんだよ。たった一日で。だけど普通は肋膜炎で水が溜っていたら小半夏加茯苓湯は使えないよな。使えないけど吐き気を止めようと思ってやったら取れちゃったんだ。ね。だから漢方のやり初めにはそういうすばらしい治験例が有るんだよ。独学でやっていると。だんだんそういうことはなくなるけれど。前にね、金沢医大だったか？東大を卒業して泌尿器科の先生をしていて腎臓結核になったんだ。自分は泌尿器科だから腎臓を切るとはしているんだけれど自分のを切るのはいやだったらしいんだ。それでうちの薬を飲んでだいぶよくなったんだけれど、それから漢方党になって一生懸命漢方の勉強をして

いたけれど終戦の時までまだ生きていますと手紙は来ていたがそれからどうなったか？その人が蓄膿症の患者で前額洞に膿が溜っている。その部分は手術が難しいんだ。前額洞の蓄膿と言うんだ。蓄膿症というのは膿が溜るんだがその先生は膿は水だからと考えて小半夏加茯苓湯を飲ましたら治ったという報告をしとったけれども。そういうことは初心者でなければできんよな。あまり勉強すると出来なくなるんだよ。それから五苓散は目の病気によく効くよ。苓桂朮甘湯を使うような場合に使うんだ。ところが苓桂朮甘湯の場合は心下悸と心下の逆満等のみぞおちが張って突き上げてくるような状態がある。胸もつかえたようでのぼせるような感じもある。五苓散の場合には熱があつてのどの渴きがあつて涙が非常に多くなる。そして小便が出ない。だけどこれは五苓散かどうか熱がある場合にはあまり区別が出来ないけれど。むしろ昔は苓桂朮甘湯に車前子を加えて使っているね。仮性近視には苓桂朮甘湯加五苓散（車前子のことか？加がかなのか判断出来ず）がよく効くと藤平君が言っているね。近視になってしまったら難しいけれど仮性近視なら割りと治るから。五苓散か苓桂朮甘湯というところだ。それからあの慢性ジク？脚気からくる病気に苓桂朮甘湯がいいと言われていたけど。どうも我々にはよくわからないが。それからフリクテン性角膜炎という病気がって体の弱い虚弱児童等の目に水疱が出来る病気だけれど、それなんかに効く。要するに水が目的なんだよね。

それから子供で陰囊に水が溜る病気で陰囊水腫。五苓散はこれに効くんだよね。それから一度脳水腫に使ったことがあるけどね、赤ん坊の時に使ったことがあるが大人になっての古くなった脳水腫にはだめかな。陰囊水腫は五苓散に車前子やその他のいろいろなものを入れて使うようになっているが入れなくても五苓散だけで効くね。

吉本：先生！五苓散の欄外の最後のところに『干』という字が有ります。『干』という字は読まなくていいんでしょうか？また意味は有るんでしょうか？

大塚：あまり重要な意味はない。ここでは読まないでもいいよ。そんな字は他にもたくさんあるよな。この字引（新字源）のね、終わりのところに助字のところにいろいろなことを書いてくれてんだよ。この本はちっちゃい本だけれども非常によく出来てるよね。この本の助字の用い方のところを今度ゆっくり見てごらん。では茵陳五苓散にいこうか。

茵陳五苓散

方極文：

第一条：

為則案：

大塚：五苓散証で肝炎がある時等に使うんだ。五苓散証だからのどが渇いたり小便が出なくて発黄する者に使う。そこでね、考えなければいけないことはね。茵陳五苓散にしても茵陳に利尿作用は有るからね。私が一度ね、五苓散を使って非常にいいんだけどね。いいけれど茵陳を入れたら吐き気がして飲めないと言ってきた患者がいた。珍しいけどね。茵陳で吐き気がすると言ったのは初めてだったけどね。茵陳を除いたら吐き気は止まったんだ。だからむやみに薬をつけ加えるものじゃないということだ。わけも分からずに加えられないね。それから今、薬屋が持って来る穂の部分の茵陳はだめだということを徳川時代の医者が盛んに言っているよね。神農本草経以降の本でも茵陳は葉と茎を使わなければいけないと書いているんだよね。茵陳の実を使うということはどこにも書いてないんだよ。徳川から明治にかけて活躍した山田業行なんかは薬屋の茵陳は全然だめだから友達に頼んで高崎の方の川原に行って茵陳を採ってもらって使っていると書いてある。だから今年の六月頃、北里の連中が安井君の自動車が多摩川へ行ったらしいんだ。それで採ってきてオ

ブジェに干していたから『これはなんだ?』と聞いたら『茵陳です。これから刻むんです』と言っておったが。『穂の部分と効きめを比べてみたら研究になるな』と言っておいたんだ。多摩川にはたくさん有るからね。じゃあ猪苓湯にいかがか。

猪苓湯

方極文：

第一条：

第二条：

第三条：

為則案：

大塚：猪苓湯は五苓散の朮と桂枝の代わりに滑石と阿膠が入るのよね。刺激性のもので揮発性の朮とか桂枝を取ってあるのよね。刺激性の成分のない、むしろ緩和・消炎的なものばかりで構成されているでしょう。これが猪苓湯の特徴だから。だからこの梔子豉湯と白虎加人參湯と猪苓湯との区別をここに述べてあるんだね。陽明病のような状態で脈が浮いて締まってのどが渇いて腹が張って喘鳴がある。そして熱があつて汗が出て悪寒がしないで悪熱がある。悪熱というのは寒けはしないでいやな熱さのこと、熱を悪むと書いてある。それで体が重い。体が重くて『心中懊__。舌上苔ある者。梔子__湯之れを主どる』『若し汗を発すれば則ち躁し、心__として、反つて譫語し、若し燒鍼を加えれば、必ず__し、煩躁して眠るを得ず』これも梔子__湯の証でいいんだよね。だから梔子__湯の場合には心熱や悪熱があるけれど悪寒がない。悪寒がなくて心中__とって何となく胸が塞がったような、何とも言えないような感じがあつてそして眠れないような場合。梔子__湯で眠れない場合と猪苓湯の眠れない場合がある。白虎人參湯では不眠のことは書いてないが白虎人參湯でもひどく興奮した場合は不眠の状態があるから。この三つの処方是不眠が出てくることになるわけだ。梔子__湯の場合には口渇はないが煩躁はある。白虎人參湯にも煩躁はある。猪苓湯の場合でも煩躁はあるから。山梔子というのは鎮静作用と消炎作用と止血作用がある。そして心熱を治して胸がつまるとか胸が痛いとか何となく胸苦しくてさ

っぱりしない時に使う。茵陳蒿湯の山梔子も心中____という状態に使われるわけだ。茵陳よりも山梔子があることの方が心中____に効くのだろう。脈が浮いて熱が出て水を飲みたくて小便が出ないとなると五苓散と区別がつかないような症状だね。ただ猪苓湯の場合には嘔吐という状態はあまりない症状だな。また嘔吐があったんじゃあかえって猪苓湯を使ったんじゃあまずいだろう。嘔吐がある場合に猪苓湯を飲ましたら嘔吐がひどくなるかもしれない。五苓散は朮と桂枝があるから健胃作用があって胃の働きを助けてくれるんだが猪苓湯は胃に働くものは入っていないからね。むしろ猪苓湯は下焦の方の薬で中焦に効かす処方ではない。膀胱炎だとか尿道炎だとかには効くけれど。胃の症状や目等の上の症状には使えない薬だな。第二章は汗がどんどん出ている時に猪苓湯をやったら小便が出てよけいに乾燥するからということを書いているがこれはあまり大したことではない。第3章は少陰病となっているからこれは下痢があって、もちろん熱もないし脈も浮かないで沈んでいるような状態があるんでしょう。そして吐いたり咳が出たりするんだけど五苓散のような強い吐き気ではない。そして心煩して眠れない。じゃあ欄外を読んでごらん。

標注文：

大塚：淋疾というのは今の淋病のことではないからね。淋疾というのは小便がたらたらして気持ちよく出ないのは全部淋疾だったんだ。尿道炎も膀胱炎も前立腺肥大も何でも小便が気持ちよく出ないでたらたらと出るようなのはみな淋疾にしていたんだ。『点滴通ぜず』とあるから小便がうまく出ないと。『陰頭腫れ痛み』とは陰部が腫れて痛い。『小腹』とは下腹が膨満して痛むのだから膀胱炎や尿道炎のような状態だろうな。